

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症例概要 利用者氏名: 70代 女性 要介護5

病名: 右肩関節脱臼

利用サービス: 入所

経過:

既往歴にうつ病と腰椎椎間板ヘルニア術後があり、メンタル不良・腰痛を繰り返されていた方。令和7年11月に娘さん宅で転倒し右肩関節脱臼受傷。整復後三角巾・バスタバンド固定の対応となった。娘様宅での介護困難のためリハビリ目的でライフサポートねりまへ入所となった。

内 容

入所当初は、脱臼後の右肩の動作時痛に加え、腰背部および左大腿部の疼痛を強く訴えていた。起居動作を促す際にも強い拒否がみられ、ADLは全般的にリクライニング車椅子での全介助を要する状態であった。食事時の離床も10分程度が限界であり、「早く部屋に戻して横になりたい」と大声で訴える場面が頻回に認められた。周囲への影響を考慮し、排泄・食事以外の時間は自室での臥床を基本としたまた、「こんなに辛いなら死んだ方がマシ」といったネガティブな発言が頻繁に聞かれ、活動全般に対する意欲は著しく低下していた。

チーム内では、まずご本人のペースを尊重しながら棟内生活を送れるよう支援する方針を共有し、過度に活動を促す関わりは控えるよう統一した。リハビリテーションでは疼痛緩和を目的とした機能訓練を中心に実施し、体調に応じて起立や立位保持の練習を段階的に導入した。また、ご本人は会話を好む性格であったため、看護職と連携し、適宜訪室しての会話や、意欲がみられる際には食堂へ誘導し、他ご利用者との交流機会を設けた。

入所後3ヶ月で疼痛の軽減および動作能力の向上がみられ、基本動作は修正自立、屋内での車椅子自走も修正自立レベルに至った。リハビリ場面では歩行器を用いた歩行訓練にも積極的に取り組めるようになった。日々の訓練において、疼痛をコントロールしながら動作が可能であった場面や、改善点はその都度フィードバックすることで、身体機能の向上をご本人と共有した。これによりネガティブな発言は徐々に減少し、「前より動けるようになった」「まだ痛みはあるが頑張れそう」「退院後は施設ではなく、再び娘と一緒に生活したい」といった前向きな発言が聞かれるようになった。

多職種で連携し、ご本人のペースを尊重した関わりを継続することが、意欲の改善とADL向上に寄与したと考えられる。